

マン・マシン・コミュニケーションにおける  
3W-2 「友好感情」生起への考察  
(7) 「舶来球技愛好者」の通信、コンテンツ提供感情  
糸魚川幸宏  
日本ユニシス（株）情報センター

### 1. 研究の目的

本論文ではパソコンにより可能になったコミュニケーションの形態事例分析から通信文化の現状を調べ、際立つ個性を示すパソコン使用者を識別し事例研究を行う。通信において便利、快適なという感情以外に不安、こわいという感情も出てくるが健全なコミュニケーションという見地からデータへの考察を行った。

### 2. 調査方法および調査過程

2-1. 調査時期、平成9年2月から平成9年7月までの間に電子メール、FAX、郵送、手渡しでアンケートを200名に配布。平成9年7月20日までに回収された70名（男性63名、女性7名）のデータを論考に用いた。

2-2. 回収された調査対象者のコンピュータ、通信文化の範囲について：年齢幅は男性は27歳から63歳までで女性は23歳から51歳である。最年少の女性(23歳)は携帯電話を絶えず携帯、会社、自宅においてパソコンを使用し、通信に関するオーバーオールな質問に対しリアルタイムに電子メールによって回答した。最年長(63歳)の男性a：北辰電機でハードウェア開発に携わり、最近は公開講座でパソコン通信への啓蒙を実施、ラジオ放送の時から野球を愛好。男性b：輸入機のプログラムを経験、舶来珍奇カメラを収集、現在、教育コンサルタントとして活動中。

2-3. リーセンドなパソコン活用、調査者はパソコン使用1年9ヶ月でリーセンド(旧知の人に歳を経て送信する)な活用がパソコンにより新しく可能になったコミュニケーションと感じ調査した。

### 3. コミュニケーション形態に関する調査結果

#### 3-1. リーセンドなコミュニケーションとして報告された事例

調査で得られたリーセンドなコミュニケーションはパソコンの介在しないものをふくめ4例しかない。報告者の年齢は20代前半-50代前半である。事例1:9年前に自転車旅行した時にユースホテルで書いた雑文を見た全く知らない人が手紙で小説の添削を依頼し、添削して返送すると謝礼をくれた(男性c、研究者)。事例2:20年会っていないところに阪神大震災時見舞金を送り電話でお礼をされた(男性d、神戸にボランティアに行った)。事例3:10年ぶりに取材をきっかけに大学の後輩にFAXをした(女性、新聞記者)。事例4:10年ほど前のクラスメイトが他の人にメールドレスを聞いたらしく電子メールが来た(女性、パソコン通信で同じ趣味の友人を得ている)。

#### 3-2. 「共有する経験」などによるコミュニケーションをしたい動機の事例

① 男性c、昭和54年8月16日の甲子園箕島一星陵の延長18回の試合の感動。②男性e、NBA、NHLの感動的なゲーム、ビデオで見ている。③男性f、g、共有したい経験の内容までは公開せず。④男性d(クリスチャン)、不特定多数に対し教会の情報を提供したい。⑤男性h、アマチュア無線7年の経験から無線仲間の一部とパソコンでの通信をしている。⑥男性I、定年後、会社時代の技術仲間と交信。⑦男性3名、テニス仲間、趣味の会、クラス会などの連絡。⑧コンテンツ提供を考えるがまだ実行していない(女性新聞記者)。⑨男性、文化的予測のことで交信したい。⑩男性2名、特殊な体験、困難を経験したことは共有されるという意見。

### 4. 「舶来球技愛好者」の識別と通信、コンテンツ提供に至る友好的状況

4-1. 本調査でパソコンでコンテンツ提供を行った人は3人でいずれもバスケット、野球などを愛好している人でそう

#### Case Study about User Freindly Systems(7) Contents Estimation

Yukihiro Itoigawa

Nihon Unisys Ltd. Information Center

した特徴から「舶来球技愛好者」と総称した。地域、教養などの長い歴史的文化的背景から「舶来球技愛好者」が6名が識別された。その人の人生にスポーツが強く影響している男性d、f、aの3人はコンテンツ作成、提供の感情報告はないが、強い「舶来球技愛好者」の特徴が分かる。男性dはコンテンツ作成、提供をこれからしたいとしている。昭和33年日本シリーズの第5戦で広岡達朗がホームへ滑り込めればセーフで巨人の優勝、西鉄の逆転優勝はなかったと記憶、人生において最も可能性の高いものを選択するという教訓を得ている。故郷、自国という意識が強い(秋田県出身)。男性fは幼少より野球に興じ盛田昭夫の「メイト イン ジャパン」に感銘している(神奈川県出身)。男性aは野球愛好が顕著、藤本英雄初の完全試合、天才打者大下弘などの記録を記憶(岩手県出身)。

#### 4-2. 「舶来球技愛好者」のコンテンツ提供と交信感情

a. ゲームを作成、パソコン通信での活用を考案:男性c、「カウンセラールーム」の心理学の先生に心理学の面白さを教えてもらい心理学ゲームを作成、ニフティの心理学フォーラムにフリーソフトとして流そうとした。ゲームを開発し賞の審査もパスしフォーラムメンバーを喜ばせたいと考えたが、パソコン通信上の心理学論争の激しさをみて発表を止めた。高校野球、寺田寅彦を愛好、時々縁の店へ行く。地域色の強い文化にはなじみずアジアより欧米にとけこみやすい。メールのやり取りで深刻な感情問題になったことはない。ホームページは発表するコンテンツがない、HTMLの勉強が面倒、サーバーの登録の仕方が分からないのが現状、一週間位の勉強でなんとかなる。深みにはまらないようにしたい。

b. ホームページからの有機米販売のコンテンツ提供:男性c、畜産をしていた時、系統管理、個体管理にパソコンを用いた。アメリカにおいて農業を実地勉強したことがあり英語で発信できる。ホームページに米販売のコンテンツを出し、年千件の申し込みがあり卸売りにプラスの売上があり通信コスト、便利さなどからうまくいった。小学生からの稲作に関する問い合わせ、教師からの米に関する質問へのコンテンツが提供、海外からの米の種子販売への問い合わせへの応答など教育的交流、対話型交信があり楽しくパソコンが活用できた。地域には桓武遷都以来の神社がありスキー、ボート活動援助で密着、パソコン会社も設立された。性別の分からない米の申し込みに不安を感じる。

c. 日立製作所商品情報の電子メール送信:男性j、コンテンツが週2-3回送信される。提供サービスはjの提案で実現化し650ユーザへ送信されている。見ず知らずの人に送信しているので受信トレイにメールが入ると奇妙な感じがする。電子メールアドレスのある同窓生とは交信。大リーグなど見るのが好きで東京オリンピックは良く覚えている。

#### 4-3. 「不安」感情に対する考察

コンテンツ提供の交信において不安を感じる事例が報告されている。男性dはホームページ使用で操作不明、情報量が多い時に不安を感じている。調査者も本調査の過程のインターネット利用で不安な感情を生じたので友好感情と反する不安感情につきコンピュータ使用20年以上の人に質問し考察の対象にした。回答1:ホームページではたびたび不快感を感じる。アクセスした瞬間に裏があると感じるもの、個人情報の一部相手に自動的に漏れてしまうもの等。アドレスが転売され個人情報が売買される危険がある。パソコン画面上の色彩、文字等からの不快感もある。回答2:インターネットはディスクの内容の破壊等を企てることも可能でありむやみに奇妙なものはアクセスしない方がよい。自分のパソコンで危険さを点検することは危険。回答3:見ているホームページに課金される不安がある。

#### 5. 結論と課題

①「舶来球技愛好者」として総称された人のコンテンツ提供は健全なものと考えられる。②70人の回答のうち6人が舶来球技を愛好(9%)、この6人は東日本出身で地域文化による個性の生育やネットワークの地域での定着などと関係が深いと考えられる。③土地の神社、信仰する宗教なども他との交信で重要な要素となる。④6人は野球愛好に代表されるようにアメリカ文化に抵抗なく適応している。⑤本調査ではコンテンツ提供は20代から40代前半の層に見られた。⑥20代の人にはパソコン利用が日常の生活に定着しており新しい通信文化に親しんでいる。⑦友好的な感情を通信、コンテンツ提供において持続するは重要であるが「舶来球技愛好者」は冷静に感情的問題の発生に対処すると考えられる。⑧不安をもたらす構造もインターネットには存在している。冷静な感情状態に使用者をおくのは使用機械のブランド、援助者のプロ性ある指示など何を知るべきか課題となる。